重度・重複障害児への指導の充実
～目標設定と指導の重点化～

企画者　西垣　昌欣　（筑波大学附属桐が丘特別支援学校）
司会者　西垣　昌欣（筑波大学附属桐が丘特別支援学校）
話題提供者　清野　祥範　（筑波大学附属桐が丘特別支援学校）
池田　彩乃　（筑波大学附属桐が丘特別支援学校）
指定討論者　川間　健之介（筑波大学人間系）

KEY WORDS:　指導の重点化　学びの連続性　桐が丘Ｌ字型構造

【企画趣旨】

共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進が叫ばれて久しい。それにより，的確な実態把握に基づいた指導目標の設定や，重点化した指導及びその評価から授業改善を行い，幼児児童生徒一人一人の能力を最大限に伸ばす教育が求められている。次期学習指導要領の改善のポイントに学びの連続性を重視した対応が明示され，従来以上に児童生徒一人一人に応じた適切な指導を積み上げることが希求されている。

そのような中，重度・重複障害児の指導においては，具体的な指導目標や指導内容の設定が指導者一人一人異なる発達観や教育観，経験に依拠することが多く，設定した指導目標や指導内容が系統的なものか，子供の実態に沿った妥当なものか等が検討されることは少ない。よって，「学びの連続性が担保されにくい」，「指導の根拠が不明瞭」という現状が散見される。

以上のことから，本企画では，系統性を踏まえた適切な指導目標を設定し，指導を重点化することで，重度・重複障害児に対して真に児童生徒の力を伸ばす指導のあり方について議論したい。

【話題提供者の要旨】

(1)　「Ｌ字型構造」に基づく指導

筑波大学附属桐が丘特別支援学校（以下，当校）では，すべての指導において，指導する事項の系統性を押さえること（縦軸），個の実態を踏まえること（横軸），及びその双方が重なったところに児童生徒一人一人の能力を最大限に伸ばす教育がある，とする考え方を提唱し，それを『「桐が丘Ｌ字型構造」に基づく指導』と称している。当校は肢体不自由特別支援学校であるが，この考え方は障害種やその程度によらず，特別な支援を必要とするすべての児童生徒への指導を考える際に活用できる。

特に重度・重複障害児の指導においては，指導者が常に指導の方向性や指導を行う目的を振り返る指標を持つためにも，Ｌ字型構造による授業づくりが有効であると考える。

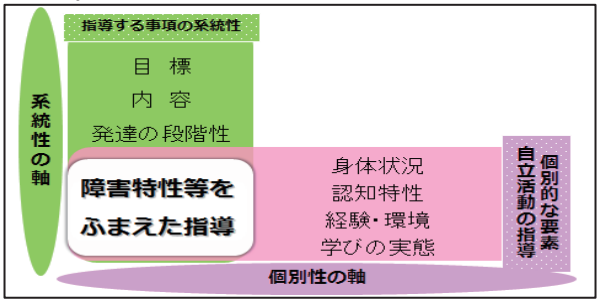

図　指導を行うための基本的な考え方「桐が丘Ｌ字型構造」

(2)　適切な指導目標・指導内容設定に向けた基軸の検討

指導目標や指導内容を設定する際，重度・重複障害児の発達の全体像を概観したり，指導する内容が国語や算数の力とどのような繋がりがあるのかについて指導者が把握したりする必要がある。そこで宇佐川(2007)を参考に，「国語や算数に繋がる指導を目指したチェックリスト・指導内容表」を作成した。これらを活用したところ，現在の指導が国語や算数に繋がる系統性において，どこに位置付き，今後の指導にどう繋がるのかを意識しながら，指導目標・指導内容を設定することが可能となった。他方で「ケース会で挙げられた課題とチェックリストから導かれる指導内容にズレが感じられる」，「ある発達と他の発達との関連性が見えにくい」等の課題もみられ，チェックリスト・指導内容表が示す縦軸の系統性と横軸との関連性を明確にしていくことが必要と考えられた。　（清野　祥範）

(3)　基軸の再整理と実態把握から指導目標・指導内容設定までのプロセスの整備

宇佐川(2007)における各層・各水準のチェック項目及び発達の様相を表として見える化し，指導目標を設定する際の基軸とした。またその表を個別の指導計画作成時のケース会で活用し，現在の指導が他の発達の節目となる事項といかに関連しているのかを念頭において児童生徒の実態把握を行うようにした。

その結果，指導者が児童生徒一人一人異なる発達の全体像を踏まえる視点を持つことや，次の段階への指導の系統性を意識できるようになった。そのため，児童生徒の中心的な課題に沿った指導目標や指導内容を設定した授業作りが可能になった。複数の教員が児童生徒の発達の全体像をとらえ，そこから発達の系統に沿った指導目標を導き出す共通の基軸を得たためと考える。また，指導目標や指導内容の系統性や妥当性を意識することは，どの授業で何を指導するのかといったカリキュラム・マネジメントの視点をもつことにも繋がり，指導の重点化を図ることにも寄与すると考えられる。　（池田　彩乃）

【指定討論者の要旨】

本研究は，重度・重複障害児の指導を行う上で課題となる指導目標・指導内容設定までのプロセスと根拠のある指導のあり方を解明しようとしたものである。本シンポジウムでは，本研究の意義と成果，課題について特別支援教育の現状を踏まえて言及する。　（川間　健之介）

【引用文献】

宇佐川浩(2007)　感覚と運動の高次化からみた子ども理解，学苑社.

(NISHIGAKI Masayoshi, SEINO yoshinori, IKEDA ayano, KAWAMA kennosuke)